

(城西人文研究第13号)

## 「シルス・マリーア」をめぐる

河内信弘

一

「シルス・マリーア」は、ツァラトウストラの誕生を伝えるわずか六行からなる詩である。ニーチェの神秘体験を伝える詩とも考えられてもいる。<sup>(1)</sup>

シルス・マリーア

ここに坐っていた、待ちながら、待ちながら、——しかし  
 なにも待つてはいなかった、善と悪との彼岸で、  
 あるときは光を楽しみ、あるときは影を、ただ戯れ、  
 湖が、真昼が、目的のない時がすべて。

そのとき、思いがけず、友よ、一は二となった。——

——そして、ツァラトゥストラが私のかたわらを通りすぎていった……

Sils-Maria.

Hier sass ich, wartend, wartend, — doch auf Nichts,  
 Jenseits von Gut und Böse, bald des Lichts  
 Geniessend, bald des Schattens, ganz nur Spiel,  
 Ganz See, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel.

Da, plötzlich, Freundin! wurde Eins zu Zwei—

—Und Zarathustra gieng an mir vorbei…<sup>(2)</sup>

これは、『悦ばしい知識』の第二版に附録として収められた「プリンツ・フォーゲルフライの歌」のなかの一篇である。『悦ばしい知識』の初版は一八八二年で、『ツァラトゥストラ』に先立つものであるが、第二版はその完成後の一八八六年である。この第二版に新たに収められたのが序文と、第五書と、「プリンツ・フォーゲルフライの歌」である。

附録ではあるが、独立した詩集と考えてよいこの「プリンツ・フォーゲルフライ」の輪郭は、序文と第五書と、『この人を見よ』から、およそ知ることができる。その序文によれば、この『悦ばしい知識』は「雪を溶かす暖かい風の言葉で書かれている。傲慢、不安、矛盾、変りやすい四月の風があり、そのために冬がまだ去っていないことを思い起させると同時に、冬を克服する勝利を思い起させる。その勝利は来るのであり、来なければならぬのであり、おそらくはすでに来ていると思われるのだが……感謝の念が絶えることなくあふれでる、まるで思いがけないことが

起きたかのように、病気の直った者の感謝の念が……なぜなら快癒がこの思いがけないことであったのである。<sup>(3)</sup>  
 この回復の喜びのあらわれが「プリンツ・フォーゲルフライ」でもあったといえよう。回復とは、ニーチェの肉体的健康を取り戻すことでもあったが、言うまでもなく精神的健康を得ることでもあった。それは、病む者として、心理学者として、病気のなかに健康と哲学の問題を持ちこみ、考えぬいて、いわば「新たな海へ」、快癒した者としてニーチェが船出することであった。

『悦ばしい知識』の初版の最終部、つまり第四書の扉には次の詩がのせられている。それは後に『この人を見よ』のなかで、「私の体験したもつともすばらしい一月に感謝をこめた一篇の詩」とニーチェが記しているものである。

聖なる一月

おまえは炎の槍で

私の魂の氷を砕き、

今、私の魂はあふれいでて

はるかに高い希望の海へといそぐ、

ますます明るく、ますます健康となり、

愛に満ちた必然のなかで、自由に。――

おまえの奇跡を私の魂はたたえる、

このうえなく素晴らしい一月よ。

ジェノアにて 一八八二年一月

## Sanctus Januarius.

Der du mit dem Flammenspeere  
 Meiner Seele Eis zertheilt,  
 Dass sie brausend nun zum Meere  
 Ihrer höchsten Hoffnung eilt:  
 Heller stets und stets gesunder,  
 Frei im liebevollsten Müss: —  
 Also Preist sie deine Wunder,  
 Schönster Januarius!

Genua im Januar 1882.<sup>(4)</sup>

「シルス・マリーア」をめぐる

ところで、「プリンツ・フォーゲルフライ」から見いだせる船出は「新しい海へ」と言えるであろうか。

## 新しい海へ

そこへ——行きたいのだ、これからは  
 自分が頼り、それに自分の舵が。  
 海はひらけ、青い虚空にむかって  
 ジェノアの船は出る

すべてが新しく、いっそう新しく輝き  
 時間と空間のなかで真昼は睡っている。  
 ただおまゑの目だけが——おそろしく  
 私をみつめる——無限というおまゑが。

Nach neuen Meeren.

Dorthin—*will* ich ; und ich traue  
 Mir fortan und meinem Griff.  
 Offen liegt das Meer, in's Blaue  
 Treibt mein Genueser Schiff.

Alles glänzt mir neu und neuer,  
 Mittag schläft auf Raum und Zeit—:

Nur *dein* Auge—ungeheuer  
 Blickt mich's an, Unendlichkeit!<sup>(5)</sup>

352 「シルス・マリーア」をめぐって

附録の詩集のなかにあつては、「新しい海へ」は「シルス・マリーア」の前に位置している。「シルス・マリーア」の後は、この詩集を閉じる「西北風ミストラルに寄せて」である。特に最後の詩にたいして、ニーチェは後に「道德の頭上を踊りこえてゆく奔放な舞踏歌」と言ったのである。<sup>(6)</sup>

さて『悦ばしい知識』における本文と附録の関係は、三八三、エピローグによく示されている。

「もう我慢できない。やめてくれ、こんな暗すぎる音楽を。私達を取りかこんでいるのは明るい午前ではないのか。緑のやわらかい大地と芝生、舞踏の王国ではないのか。楽しくやるのに、いままで、こんな時があったらうか。誰か歌ってくれないか、午前の歌を、明るくって、軽ろやかで、飛べるような、そうすればふさぎの虫も逃げてゆく——いつそのこと、ふさぎの虫を一諸に誘って歌って踊らうか」<sup>(7)</sup>

ところで本文つまり暗すぎる音楽は容易ならざるものであった。例えば一二五「狂気の人間」、白昼に提灯をかざしながら、神をさがし、人々にむかって、我々が神を殺したのだと言い切る男の話。三四三「我々の快活さが意味するもの」近代の最大の出来事——「神は死んだ」ということ、キリスト教の信仰が信ずるに値いしないと断言し、「海が、われわれの海が、再び眼の前に開けた」という章、その前に置かれた三四二「悲劇が始まる」ではじまる、『ツァラトゥストラ』の冒頭の一節。

G・マルセルが、『悦ばしい知識』の一二五、三四三を引用しつつ、「とくにツァラトゥストラで表現されているような超人到来への信仰が、ほとんど専らニーチェ的な事柄にとどまっているのに対して、神の死の断言は限りなく多くの人々の心のなかに、悲劇的な、決定的と言ってよい反響を見出した」と述べている。専らニーチェ的な事柄にとどまると、マルセルは言うが、「超人の出現は、人間があえて神の死を恐れず、自分が何らかの仕方でその責任を負っていることを認めるといふ行為をまっしてはじめて可能になってくる」と、ニーチェに深い理解を示している。「自らを超人の告知者として敢えて示そうとする人が、超人の属性をなにがしか自分自身に対して要求しないなどということ、おそらく不可能なことであつたらう。そしてこの要求のもとに、脆弱な人間の有機体がついに崩れてしまったのは当然のことではなかつたらうか」<sup>(9)</sup>。

ニーチェの「個人的な運命に至るまで」の深い理解を通し、そして、それを逆の光としてニーチェを見るならば、「シルス・マリーア」の前後の時期は、特に注意を払わなければならないであろう。病氣、快癒、そして狂氣。この快癒の時間が「プリンツ・フォーゲルフライ」の歌われた時でもあった。そして、突然のごとき、快癒の象徴が「シルス・マリーア」と言えそうである。

一一

ツァラトゥストラの誕生を伝える「シルス・マリーア」はスイスのオーバー・エンガディン地方のまことに小さな保養地シルス・マリーアの名を取ったものである。海拔およそ千八百メートル、つまり「六千フィート」の地であり、二千メートルから三千メートル級の山脈にはさまれた谷あいにある。山々は谷からしばらくは縦を中心とした森をなしているが、その上は岩肌を露出し、尾根を連ねていく。谷はかなり広く、湖も多く、静かに水をたたえている。そのうちの二つの湖シルバラーナ湖とイゾラ湖にはさまれた小さな村がシルス・マリーアである。

ツァラトゥストラが美しい風光の地で、ニーチェのなかに生れたことを記念して、その地の名が詩のタイトルとなったのであろうか。それともシルス・マリーアを取り囲むオーバー・エンガディン地方の自然はニーチェに特別の意味を持っていたのであろうか。

『漂泊者とその影』から、三つのアフォリスムス、つまり、二九五、三二七、三三八を取り出してみよう。二九五  
 ≪Et in Arcadia ego≫（われもまたアルカディアにありき）には、最初原稿にはあったが、後に削られた部分をカッコ  
 におさめて添えておこう。

(一昨日の夕方、クロード・ロラン的な感動にすっかり侵っていたが、とうとう激しく涙がこぼれて来て、長い間とまらなかつた。このようなことをまだ私は体験できたのだ。地上がこのようなものを見せてくれるとは、私は知らなかつた。それはすぐれた画家が作り出したものとはばかり思っていた。その英雄的―牧歌的なものを、今、私の魂は発見したのである。そして古代のあらゆる牧歌的なものが、今一挙に、私の前でそのベールをとり、開示されたのである。今の今まで、私はそれについて何も理解していなかつた<sup>(1)</sup>。)

「*Et in Arcadia ego*」——私が見下すと、波のような丘のむこうに、樅や老木の蔽しさを持つ唐檜のあいだから、乳緑色の湖 *einen milchgrünen See* が見えた。私のまわりにはさまざまの岩があり、大地は花々や牧草で彩どられていた。私の前を、羊の群は動きまわったり、転がったり、手足を伸ばしたりしていた。遠くには群らがついている牛もいれば、離れ離れの牛もいる。針葉樹の森の近く、澄みきった夕方の光のなかだ。別の群は近く、暗くみえる。すべては静謐と夕方の満足につつまれていた。時計はおよそ五時半をさしていた。群のなかの雄牛が一头、白く泡立つ小川に入り、ゆっくりと、水にさからい、あるいは従いながら、激しい流れをたどっていった。そのようにして、この雄牛は雄牛なりに強烈な快感を味っているのである。二つの黒い姿は、ベルガモ人らしいが、牧人であつた。少女はまるで少年と同じ服を着ている。左手には、広い森林帯の上に断崖と雪原、右手には、私の頭上高く、陽の光のベールのなかに漂うように、二つの巨大な氷結した岩角——すべては偉大であり、静謐であり、澄み切っていた。この全体をつつむ美しさに戦慄を憶え、美しさの啓示された瞬間に無言のうちに崇拜の念を抱いた。思わず、これ以上に自然的なものは存在しないかのように、この純粹で明るい光の世界(この世界では憧れとか、期待とか、先を見たり、振り返って見たりとか不要である)にギリシヤの英雄達を配していたのである。プサンやその弟子のように感じていたに相違なかつた。英雄的にそして牧歌的に。——そして、このように生きた人々がおり、このように絶えず自己を世界の内に、世界を自己の内に感じ、とつた人々がい



たのである。そして、その中で最も偉大な人間のひとりであり、英雄的、牧歌的に考えることの創始者がいた。つまりエピクロスが。」(一九五)<sup>(2)</sup>

一八七九年七月から八月にかけて『サン・モリッツ 思想の歩み 一八七九年』とタイトルの掲げられている憶え書きがある。<sup>(3)</sup>そこには、わずか五項目のメモが記されているにすぎないが、その二番目には「乳緑色の湖という表現が気に入らない人は、口で読んで目で読まないこと」と記され、その次の項目がさきの引用のカッコの部分である。オーバー・エンガディーンの風景に接したニーチェの感動は、実に深いものであることが分る。ただ美しい自然に接したという心の震えをはるかに超えている。

これに先立つおよそ五年前にニーチェは次の様な内容のことを述べている。哲学者や芸術家や聖者があらわれる時、自然は喜び、飛躍し、自らの目標に達したこと、また自らの目標を持つことを忘れてはならないことを悟る。自然は光明で満たされ、人間が美と呼ぶ穏やかな夕の疲れ *eine milde Abendmüdigkeit* がその顔に浮ぶ。その光明に満たされた顔で *mit diesen verklärten Mienen* 語るものが存在の啓蒙 *Aufklärung* である。澄みきったアルプスの氷の気まで、そして霧や覆うものもなく、物事の根本的性質が粗く、硬く、分りやすく表われているところまで登ることができたら、と。<sup>(4)</sup>

*Abendmüdigkeit* は穏やかな光で満たされたゆっくりとくれてゆく夕方の光景であり、抽象的な表現ではなからう。この美しい自然のひと時、人間を生みだした自然の美しい姿に相応する人間とは、おそらくこの間に促されて生まれた表現ではないであろうか。幼い時から自然を愛したニーチェをぬきにしては、これらは考えられないと言ってよいと思われる。<sup>(5)</sup>この自然を愛する少年ニーチェが後にエピクロスの世界を、クロード・ロランの絵の世界を見いだしてゆく。さらにそこからまた自然そのものに目を開かれ、そして、自然から開示されるものを受け取ってゆく。<sup>(6)</sup>夕の疲れに啓蒙を見出し、アルプスの気の中に事物の根本性質 *die Grundbeschaffenheit der Dinge* が示される

のを予感していたのである。

そのアルプスの大気、オーバー・エンガディーンの風景に実際に接し、そこにクロード・ロランを、エピクロスの世界を配した。しかし St. Moritzer Gedanken-Gänge 1879……サン・モリッツ思想の歩み……が暗示するように、その感動は深められてゆく。

「忘れられた自然。——我々は自然について話しをするが、そのとき自分自身のことは忘れている。我々そのものが自然なのである、それでもやはり。したがって、我々が自然という言葉を口にするとき感ずるものと、自然そのものは全く別のものである。」(三二七)<sup>(7)</sup>

この忘れられた自然 *die vergessene Natur* とはいかに考えたらよいのであろうか。人間、この忘れられた自然と考えてよいと思うが、人間のために世界を作り出そうとする神の創造的意志を全ての基礎においたキリスト教を念頭におかなければならない。人間は神による特別の被造物であり、神の唯一の似姿として存在し、自然の世界はその外界にすぎない。「……真に幸福な生活は、人間が神をもとめ、神を見出したときのみ、得られる。この世界を超越し神に向う存在に比べるなら、一般的な、全てに共通の世界の存在は人間を越えた、永遠の世界秩序ではなく、単なる外界、ある外的なものなのである。」<sup>(8)</sup>

このような歴史的、あるいは伝統と化した前提をぬきにしては、この「忘れられた自然」も「自然そのものは全く別物」ということも考えてはならないと思われる。

(106) 「自然の分身現象。——多くの自然の風景のなかに、我々は自分自身を再発見し、快い戦慄を感ずる。これは最

も美しい分身現象である。その感覚をまさにここで味あうことのできる人はとても幸せに違ない。このたえず陽のそそぐ十月の大气、朝早くから夕方まで悪戯っ子のように幸せな風の戯れ、澄みつきた明るさと、まことにほどよい涼しさのなかで、まことに厳しい万年雪のかたわらに恐れることもなく横たわる高原、この高原の全体をつつむ優雅な厳しきをもつ丘と湖と森の性格のなかで、イタリアとフィンランドが結ばれ、自然のもつ、あらゆる銀色の色調の故郷であると思われるここで。——さらに次のように言うことのできる人は幸せだ。『自然のなかには、ここよりはるかに偉大なもの、美しいものがたしかに存在するであろう。がしかし、ここが私には心からふさわしく、親しく、血がつながっている、いや、それ以上である』と」(三三八)<sup>(9)</sup>

シルス・マリーアをめぐる自然に接してのニーチェの心の動きは明らかになったと思う。この延長上に「シルス・マリーア」は置かれなければならない。

### 三

『悦ばしい知識』からは「シルス・マリーア」のいわば周辺を、『漂泊者とその影』からは、「シルス・マリーア」に至る道を考えてみた。それでは「シルス・マリーア」そのものの成立の過程をみてみることにしたい。

一八八二年の夏から秋にかけての憶え書きのなかに、「ポルトフィーノ」と題する詩がある。

Portofino.

Hier sitz ich wartend——wartend? Doch auf nichts,

Jenseits von gut und böse, und des Lichts  
 Nicht mehr gelüstend als der Dunkelheit,  
 Dem Mittag Freund und Freund der Ewigkeit.

ここで私は待ちながら坐っていた—待ちながらだつて？　しかし  
 何も待つてはいなかった、善悪の彼岸で、  
 もはや闇にも光にも飢えてはいない、  
 真昼の友であり永遠の友として。<sup>(1)</sup>

「シルス・マリーア」をめぐって

明らかに「シルス・マリーア」の前身は「ポルトフィーノ」である。ポルトフィーノもまた地名である。北イタリ  
 アの地中海岸にあり、コロンブスで有名な都市ジェノヴァから三〇キロメートルほどはなれた、小さな半島の先端で  
 あるこの地はシルス・マリーアと同様ニーチェには深い関係がある。「永遠回帰」の思想がシルス・マリーアで浮び、  
 ポルトフィーノでツァラトゥストラの第一部全体が襲つてきたのである。それは「シルス・マリーア」の前身と言  
 うべき「ポルトフィーノ」からほぼ半年後のことである。

さらに一八八二年十月から、一八八三年二月の憶え書きは、「シルス・マリーア」にはほぼ近づいてくる。タイト  
 ルはない。

Hier saß ich wartend—

Jenseits von gut und böse, bald des Lichts

Genießend bald des Schattens : ganz nur Spiel  
Ganz Meer, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel.

ここで私は待ちながら坐っている――

善悪の彼岸で、あるときは光を

あるときは影を楽しむ、ただ戯れ

海が、真昼が、目的のない時がすべて。<sup>(2)</sup>

しかしながら、「シルス・マリーア」が海で浮かんだことを示す Meer 海が残っている。「ポルトフィーノ」では存在した auf nichts は落ちていいる。sitz という現在形は saß と過去形になった。そしてなにより光も影も自在に楽しむ余裕が生れている。

一八八五年秋から八六年の秋にいたる憶え書きでは「プリンツ・フォーゲルフライ」が『善悪の彼岸』に附録として、所収する予定であったことだろうかがわかる。ここでは「プリンツ・フォーゲルフライの詩と寸鉄」と題され、十四篇の題名があげられている。<sup>(3)</sup>そこでは、「シルス・マリーア」の名が見られ、四番目の位置に配列されている。ちなみに最初にあげられた詩は「西北風ミストラルに寄せて」であり、六番目には、先に引用した詩と思われる「新しい海」である。「プリンツ・フォーゲルフライ」の配列と比べると興味深い。

堂々として、静かな均整を持ちながら、海へと落ちてゆくポルトフィーノの岬、そこでジェノア湾はその旋律を歌い終えて尽きる、<sup>(4)</sup>とニーチェの言ったポルトフィーノで生れた一篇の詩が、しだいに形を整えながら、南から北へのぼり、「シルス・マリーア」となって完成する。

先に引用したように「イタリアとフィンランドが結ばれ、自然の持つ、あらゆる銀色の色調の故郷」で、海は湖となり、最後の二行が加えられたのである。「一は二となる」と詠われ、その一方に「ツアラトゥストラ」の名が与えられた。

一八八二年の「ポルトフィーノ」から少くなくみても三年は経過してから、「シルス・マリーア」は出来あがったことになる。別の表現をすれば、着想から少くなくとも三年後、ようやくにして、ツアラトゥストラ誕生を伝える詩となったことである。「同じものが再び回帰すること」という「永遠回帰」の思想は、「一八八一年八月はじめ、海拔六千フィートそして人間的事柄をこえた、はるかに高いところで」<sup>(5)</sup>とあるメモに記されている。そして、そのメモからしばらくしての八月末のメモには次のようにある。

「真昼と永遠、新しい生の指針。ツアラトゥストラはウルミ湖で生れ、三十歳のとき故郷を去り、アリア地方に入り、孤独の十年山のなかでゼンドアベスタを記す」<sup>(6)</sup>。

したがって、「一は二となった」というツアラトゥストラの誕生そのものは、永遠回帰の思想を得てから、ほんのしばらくしての一八八一年八月のある日ということになりそうである。<sup>(7)</sup>ツアラトゥストラの誕生と、その誕生を詠う「シルス・マリーア」の誕生とはかなりの時間のづれがあったわけである。

#### 四

「シルス・マリーア」そのものを読むことにしよう。

Hier sass ich, wartend, wartend,—doch auf Nichts,

hierここは当然シルス・マリーアでなければならぬ。しかし、イタリア、ポルトフィーノの岬も重ねておかなければならない。そしてイタリアとフィンランドを結び合せた地という意味においても。それではイタリアはともかくフィンランドは何を意味するか。残念ながら、その意味を考えるだけの余裕はない。ただそこから「人の往まない、荒涼とした白熊のすむ地」と「南の無邪気さ<sup>(1)</sup>」との中間、分水嶺の地点としてのスイス、シルス・マリーアがみちびき出されてくるであろう。

ニーチェはツァラトゥストラの誕生の地をポルトフィーノではなく、シルス・マリーアと詠った。ツァラトゥストラの誕生をめぐって、詩は南から北へ、海から山へ、シルス・マリーアに引き戻されていったわけである。

この一行には wartend, wartend—doch auf Nichts という、一読すると矛盾に満ちた表現があるが、これは次の三行の解説のうちに含まれる。

Jenseits von Gut und Böse, bald des Lichts

Geniessend, bald des Schattens, ganz nur Spiel,

Ganz See, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel.

「シルス・マリーア」は『ツァラトゥストラ』の完成後に、完成した形で附録に収められたのだから、『ツァラト

ウストラ』の圏内を包含しているといつてよいであろう。この三行に深い関りがあると思われる『ツァラトゥストラ』第四部「正午」には、正気と狂気、忘我と覚醒との境を示す、しかもそれらを見事に表現しきった一節がある。

「静かに、静かに。世界は今まさに完全となったのではないか、いったい私になにが起きたのだろうか。

そよ風が、姿は見えないが、なめらかな海の上で軽ろやかに、羽毛の舞うように、そのように——眠りが私の上で舞っている。

眠りは私の目を閉ざすこともなく、私の魂を醒しておく……

……

ああ、幸福、ああ、幸福だ。ああ、わが魂よ、おまえはきつと歌いたいのだろうな。おまえは草のなかで横になっっている。だが今は牧人も笛を吹かない、秘めやかな、おごそかな時だ……歌うな、静かに、世界は完全だ。」<sup>(2)</sup>

「シルス・マリーア」と内的関連があると思われる部分を引用したが、見事な部分は消えてしまうことになった。ところで「眠りは私の魂を醒したままにしておく」とは常識的には奇妙である。魂を眠らせてこそ眠りのはずである。「待ちながら、しかし何も待っていないかった」と同種の表現方法といえようか。しかし、そのまま受け取らなければならぬし、またそれはおそらく理由を述べることもなく可能なことであろう。

「世界は完成した Die Welt ist vollkommen.」は「戯れ、湖、真昼、目的を持たない時間がそれぞれ完全である ganz nur Spiel, ganz See, ganz Mittag, ganz Zeit ohne Ziel」と重ね合せて考えてよいであろう。ただし、それぞれを完全であると言っているのは、それぞれにニーチェが身を委ね、それぞれと一つになっていることがしのば



れる。Die Welt ist vollkommen. の個別的表現と言えよう。興味深いのは海 Meer が湖 See に変ることによって、一種の気怠さが失せてくる。「正午」には正気と狂気と、忘我と覚醒との混淆の上に漂うある種の気怠さがある。それは海と関わりがあるのである。南の海の気怠さである。それを示す海が湖に変ることによって、大きく変る。見渡すことのできない海の広がり、視界におさめられ、山によって囲まれた湖の透明さに変るのである。もっとも See は海とも湖とも理解される語ではあるが。

ニーチェが、素晴らしい自然からの便りとも言うべき夕の疲れ Abendmüdigkeit から誘われて、アルプスの大気、澄みきった大気への憧れを抱いていたことは、すでに記した。憧れと感動と、正気と狂気と、忘我と覚醒と一つになった微妙で不思議とも言うべきものを心の奥に秘めつつ、ツァラトゥストラの誕生が詠われるわけである。

Da, plötzlich, Freundin, wurde Eins zu Zwei —

— Und Zarathustra gieng an mir vorbei...

「自然の分身現象 Doppelgängerei」に促されるように「一は二となった」のであろうか。

それを語りかける相手は、ルー・ザローメであろうといわれている女友達 Freundin である。後に「シルス・マリア」はもう一度見直される。女友達ではなく H・シュタインにむけられ、のちに一個の独立した詩となり、『善悪の彼岸』の後歌 Nachgesang として収められた「高い山々のなかから」のなかで、繰返される。そのとき、南の大気、海の気配は全くなく、峻厳な高い山のなかから詠われる。

この歌は終わった。期待の甘い叫びは

口まであがりかけたが、消えていった。

魔術師が来たから、ふさわしいときに友が

真昼の友が——だが、君達よ、それが誰か、聞いてくれるな

真昼であった、そのとき一は二となった。

さあ、祝おうか 力をあわせた勝利を信じ

祝祭のうちの祝祭を。

友ツアラトウストラが来たのだ、客のなかの客が。

世界は今や晴れやかに笑い、戦慄の幕は裂けてゆく

光と闇の婚礼のときがきた……。(3)

「一は二となる」つまり、ニーチェの分身が、ニーチェより生れた。「魔術師」の言葉が使われているように、神秘的体験をあらわすと理解する他ないかも知れない。

しかし、それでは十分な理解とは言えないのではなからうか。一は単にニーチェのことであろうか。それとも、世界に没入し、世界と化したニーチェをも含む全てを一と言ったのか。あるいは逆にニーチェのうちに世界が没入し、世界と化したニーチェとしての一と言ったのか。

「ポルトフィーノ」から「シルス・マリーア」に至る時間と、最後になって「一は二となる」を含む二行が追加されたことを思えば、この二行は十分に考量されて生まれたものである。ニーチェは『ツアラトウストラ』を伝えるにあたって、自分が「圧倒的力の化身、単なる口、単なる媒介」となったと記した。それをふまえての「一は二」で

あったと言わなければならぬ。すくなくとも、詩の完成までの時間の経由を考えれば、そのように言うことができる。「この人を見よ」から『ツァラトゥストラ』について記されているところを引用しておこう。

「突然、表現できないほど確実にそして微妙に、あるものが人の奥底を揺り動かし、感動させるあるものが、見え、聞えるという意味において、啓示という概念はただ事実そのものを述べている。聞き、求めない、受け取り、誰が与えるかと問わない。稲妻のようにある思想が閃めく、必然にためらいのない形で——私は選択したことがなかった。それは恍惚状態である。そのおそろしい緊張は、ときに解けて涙となり、そのとき思わず、歩みは激しくなったり、ゆるやかになったりする。爪先までに至る無数の微妙なおのきをはっきりと意識している完全な忘我、ある幸福な深み、そこにあつては最奥の苦痛も陰鬱もさまたげとならず、逆にその幸福の前提として、呼び起されたものとして、このような先の満ちたなかにおける必然の色彩として作用する。(中略)……全ては最高度に必然的に生ずるが、自由の感情、何ものにも制約されない存在、力、神々しきものの嵐のなかで生ずるかのようである。<sup>(4)</sup>」

これは『ツァラトゥストラ』の著作の成立を伝えるものであるが、ツァラトゥストラそのものの誕生のときのニーチェの心の状態とも理解可能であろう。これほど激しい忘我 *Außer-sich-Selbst* ではなかったかもしれないが。

かつて『悲劇の誕生』のなかで、ニーチェは次のように書いていた。「今や動物も語り、大地が乳と蜜を与えるように、人間からも超自然的なものが響きでてくる。彼は自分を神と感じ、夢のなかで神々が逍遙するのを見たように彼自身がうっとりとして高められたようになる。人間はもはや芸術家ではない。人間が芸術品になってしまった。全自然の芸術力は、根源的一者の最高の喜びの満足となって、陶酔の戦慄のもとに啓示される。<sup>(5)</sup>」

また、別の個所では、「抒情詩人は、ディオニュソスの芸術家として、完全に根源的一者と一つになり、根源的一

者の苦痛、矛盾とまったく一つになっている。」と。<sup>(6)</sup>

かつて根源的一者 *das Ur-eine* と言ったが、「シルス・マリーア」における *Eins* は、はやくからニーチェのうち  
に用意されていたものと言ってもよいであろう。

『悲劇の誕生』の観点からすると、ニーチェは世界と一つになり、世界の媒介と化し、そこからツァラトゥストラ  
が生れた。「それが一は二となる」の意味であろうと思われる。

#### 補記

『悦ばしい知識』からは『シルス・マリーア』の周辺を、『漂泊者とその影』からは「シルス・マリーア」に至る道を、そしてその成立の過程、「シルス・マリーア」そのものを考えるという順を追ってきた。実を言えば、「一は二になる」の1の意味を考えようとするのが目標であった。しかし、その点において、この論文はその準備の段階で終わってしまったと言う他はない。この拙稿の根底にあるのは、『宗教と文化』西谷啓治著の内「ニーチェのツァラトゥストラとマイスター・エックハルト」であった。しかしそこには文字通り、一歩も踏み入ることはできなかった。

#### 使用テキスト

Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari, Walter de Gruyter, 1967～.

これより引用のものは註におき巻数およびページのみを記すこととする

Friedrich Nietzsche, Werke in drei Bänden, 6. Aufl. Hrsg. von K. Schlechta, C. Hanser, 1969.

#### 註

##### 1

(1) E. Bertram: Nietzsche, Versuch einer Mythologie. 8. Aufl. H. Bouvier, 1965. S. 245.

ニーチェ自身も「高き山々のなかから」, 'Aus hohen Bergen' において、魔術師が来たから一は二となったと歌ってい

等。(四) 参照の事

- (2) V<sub>2</sub>, S. 333.
- (3) *ibid.*, S. 13.
- (4) *ibid.*, S. 199.
- (5) *ibid.*, S. 333.
- (6) V<sub>1s</sub>, S. 332.
- (7) V<sub>2</sub>, S. 319.
- (8) K. Löwith: „Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen“ W. Kohlhammer, 1956 S. 108 において、『ツァラトゥストラはかく語った』の世界は救済者の人間の影の世界であり、その踊りも笑いもそれぞれ説得力に欠けている。ツァラトゥストラの“放浪”だけはニーチェの人間としての現実に呼応している。」と述べている。
- (9) 『人間、この問われるもの』G・マルセル著、西村嘉彦、福井芳男訳 春秋社、一九六七年(マルセル著作集第六巻のうちより)三二六～三二九頁。ドイツから一步離れたフランス人の目に映ったニーチェとして引用。

二

- (1) IV<sub>3</sub>, S. 468.
- (2) *ibid.*, S. 324～325.
- (3) IV<sub>3</sub>, S. 468.
- (4) III, S. 376～377 („Unzeitgemäße Betrachtungen III: Schopenhauer als Erzieher“.)
- (5) 一八五八年、十四歳の時に記した「私の略歴 I 子供の頃」には次のような箇所がある。  
「子供の頃から私は孤独を求め、誰にも邪魔されないうで自分の好きなように出来るときが一番楽しかったのです。そしてそれは大抵自然という自由な宮殿のなかでのことでしたが、そこで最高の喜びを発見しました。そこではいつも雷雨が最も素晴らしい印象を与えてくれました。遠くまで響く雷鳴とピカッと閃白く光る稲妻は私の神に対する畏敬の念を強くするのでした。」(Werke in drei Bänden III, S. 18～19)
- (6) 『大いなる正午—ニーチェ論考』(水上英廣著 筑摩書房、一九七九年)に所収の「ET IN ARCADIA EGO—ニーチェにおける英雄的・牧歌的風景」参照。『漂泊者とその影』の二九五、三三八を骨格にすえて、その理解のためにローマ

時代から中世を経て、ゲーテ、ニーチェに至る「アルカディア」の流れを追っている論文である。「理想的風景」Ideal-landschaft' もしくは「英雄的・牧歌的風景」(heroisch-idealische Landschaft)であるアルカディアという理想郷がヨーロッパの絵画や文学の歴史のなかで重要な位置を占めていたことも明らかになっている。

(7) IV<sub>3</sub>, S. 334.

(8) K. Löwith: „Gott, Mensch und Welt“ Vandenhoeck & Ruprecht, 1967, S. 18.

(9) IV<sub>3</sub>, S. 337.

II

(1) VII, S. 107~108.

(2) ibid. S. 152.

(3) VII, S. 83. 『善悪の彼岸』の附録予定のものと、『悦ばしい知識』の附録と各タイトルだけあげておこう。

Jenseits von Gut und Böse

Anhang:

Lieder und Pfeile

des

Prinzen Vogelfrei.

Die fröhliche Wissenschaft

Angang:

Lieder des Prinzen

Vogelfrei.

1. An den Mistral.

2. An Goethe.

3. An gewisse Lobredner.

4. Sils-Maria.

5. Einsiedlers Mittag.

6. Nach neuen Meeren.

7. „Die Tauben von San Marco“

8. Über der Haustür.

An Goethe.

Dichters Berufung.

Im Süden.

Die fromme Beppla.

Der geheimnisvolle Nachen

Liebesklärung.

Lied eines theoretischen Ziegenhirten.

„Diesen ungewissen Seelen“.

9. Der ächte Deutsche. Narr in Verzweiflung.  
 10. Parsifal-Musik. Rimus remedium.  
 11. An Spinoza. „Mein Glück!“  
 12. Rimus remedium. Nach neuen Meeren.  
 13. Narr in Verzweiflung. Sils-Maria.  
 14. Nachgesang. An den Mistral.

- (4) V<sub>2</sub>, S. 205 幾分原文とは異なる。  
 (5) V<sub>2</sub>, S. 392.  
 (6) *ibid.* S. 417.  
 (7) C. P. Janz 氏『ニーチヤ』, Friedrich Nietzsche Biographie“ C. Hanser, 1978. Bd. 2, S. 80 及び『永遠回帰の思想はヘンガーディンで生れ、その思想の告知者としてのツァラトゥストラはリビエラ、正確に言えばラパロ湾のものである』から、ヘンガーディンにある『ツァラトゥストラの岩』は誤解にもとづくことを述べている。しかし、そこまで言切る必要はないと思われる。
- 
- (1) 「高山のなかから」, Aus hohen Bergen ‘「南の国より」’, Im Süden ‘から借用したものである。  
 (2) VI, S. 338～339.  
 (3) VI<sub>2</sub>, S. 255.  
 (4) VI<sub>3</sub>, S. 337.  
 (5) III, S. 26.  
 (6) *ibid.* S. 39～40.